

中井正一におけるメデイウム、ミッテル概念の関係性を再考するために  
— 「脱出と回帰」(1951) 等の再検討と 「メデイウムに支えられたミッテル」

後藤嘉宏\*

For the Reconsideration on the Relationship between Mittel and Medium  
of Masakazu NAKAI: Re-examination of 'Escape and Return' (1951)  
and "Mittel supported by Medium"

Yoshihiro GOTO

抄録

中井正一の全著作を貫く概念としてメデイウム、ミッテルがある。稲葉三千男は中井が「メデイウムからミッテルへ」と終生唱えていたと考え、それに対して杉山光信は中井が「メデイウムに支えられたミッテル」を晩年に主張したという。杉山はその論拠として中井の「農村の思想」(1951)を挙げていた。これは杉山説の決定的証拠であるが、杉山説を裏づける他の論拠は傍証しかなかった。本研究では新たに中井の「脱出と回帰」(1951)等の美学論文において「メデイウムに支えられたミッテル」を裏づける記述をみいだした。さらに中井のテキストに「メデイウムからミッテルへ」と「メデイウムに支えられたミッテル」が併存するのはなぜなのかをあわせて探った。

Abstract

Medium and Mittel are key concepts through the entire works of Masakazu NAKAI. Michio INABA claimed that Nakai had the lifelong advocacy "from Medium to Mittel", but Mitsunobu SUGIYAMA refused that Nakai had advocated "Mittel supported by Medium" in his last years. Sugiyama cited 'Thoughts of Countryside'(1951) as evidence for his argument. This was a conclusive evidence of Sugiyama thesis, but the other argument to support Sugiyama thesis was weak. This time, by re-reading Nakai's 'Escape and Return'(1951) in his aesthetics papers, we find out the description providing decisive evidence to support "Mittel supported by Medium". In addition, we find out the coexist reason of "from Medium to Mittel" and "Mittel supported by Medium" explored together in Nakai's text.

\* 筑波図書館情報メディア系  
Faculty of Library, Information and Media Science  
University of Tsukuba

## 1. はじめに—この問題の研究史と私の過去の研究

美学者で国立国会図書館初代副館長の中井正一(1900-52)はメディアウム、ミッテルという二つの媒介概念を用いて、独得なその美学理論を展開した。彼の美学理論は映画、それも記録映画を意識していたため、現代のマス・コミュニケーション論の先駆けともされている。

早い時期に中井のコミュニケーション論に着目したものととして鶴見俊輔がいる。鶴見以外にも山田宗睦、江藤文夫、鈴木正、私の亡父後藤宏行ら思想の科学研究会の主力会員で中井に注目した研究者は多く存在する。加えて、中井が事実上主宰したとされる雑誌『世界文化』(1935-37) 同人の主要人物たる、武谷三男、久野収、新村猛、和田洋一が、戦後、同研究会のメンバーとなっている<sup>1)</sup>。

稲葉三千男(東京大学新聞研究所助教授(当時、のち同教授))は中井の媒介概念に初めて着目した。思想の科学研究会の会員歴もある稲葉は日本新聞学会の学会誌『新聞学評論』において、1969年に「中井正一の“媒介”論紹介」(『新聞学評論』18号)((稲葉1987)に所収)を発表した。私は本稿冒頭にて「中井正一はメディアウム、ミッテルという二つの媒介概念を用いて、その美学理論を展開した」と述べたが、じつはメディアウム、ミッテルという言葉そのものが中井の著書に頻出するわけではない。ただしこの対概念と関連する諸概念を含めて考えると、メディアウム、ミッテルの両概念は彼の思想全般に密接に関わる。しかしこれら両概念は1960年代には中井を研究する者からまだ意識されていず、この稲葉の論文で初めてメディアウム、ミッテルの対概念は研究対象として明確化された。なお、メディアウム、ミッテルはともに媒体、媒介、やりとりと訳される名詞ではあるが、メディアウムは中井に即していえば媒体、媒介物、他方、ミッテルは媒介する、コミュニケーションすることと、ここでは概略を記しておく。メディアウム・ミッテルの概念の詳細については2.1で述べる。

稲葉の論攷の主旨は中井が「メディアウムからミッテルへ」という主張を強くしているというものであった。それに対して当時東京大学新聞研究所助手でのちに同研究所教授となる杉山光信は、稲葉の主張を批判的に意識しながら、中井が単純に「メディアウムからミッテルへ」と主張し続けたわけではなく、晩年、「メディアウムに支えられたミッテル」との主張に転じたと、1975年東京大学新聞研究所の紀要に載せた論文「言語・映画の理論と弁証法の問題—中井正一論の試み」(『東京大学新聞研究

所紀要』23号)((杉山1983)に所収)に記した。

中井についてではないが両教授に直接学んだ私は、九州大学に提出した乙種博士論文およびそれを改稿した『中井正一のメディア論』(学文社、2005)でこの問題に正面から取りくんだ。杉山が論拠とした文献のうち傍証として扱った「芸術における媒介の問題」(1947)等に対する杉山の解釈に対する異論はあるし、晩年の中井が、扱う対象領域により主張にずれがあり、矛盾を抱えているので、時期による中井の変化という杉山の指摘に首肯できない点も指摘したが、拙著では基本的には「稲葉・杉山論争」<sup>2)</sup>において杉山に分があると結論づけた。

他方、その後、中井及びその周辺、三木清や戸坂潤に関する研究を私は本誌等に掲載していったが、基本的に稲葉に近いスタンスで執筆した。その理由は第一に、中村雄二郎『共通感覚論』(岩波書店、1979)において、三木清、戸坂潤、中井正一、三枝博音<sup>3)</sup>の1930年代の試みを捉え返すことが重要であり、そのことで西田幾多郎の「場所」の論理<sup>4)</sup>の乗り越えが可能となると指摘されたが、この指摘を意識しながら、2005年以降の研究を行ったためである。『中井正一全集』の稲村徹元が作成した年譜(全集4巻 pp.372-375)<sup>5)</sup>において、中井が京都大学哲学科在学中に親しく接したとされる人物に三木清、戸坂潤がいる。私の博士論文以降の遅々たる研究は京都大学哲学科の先輩にあたる彼らから中井が受けたであろう影響を捉えるという問題設定で進め、その延長上に中井の著書に出会った。共通感覚は2.で後述するようにミッテルに親和的になる。理由の第二に、論拠となる中井のテキストの問題がある。先ほど記したが、拙著では「稲葉・杉山論争」において杉山に分があるとしつつ、杉山の傍証に難をつけたが、決め手となる論拠として杉山の挙げたものに異を唱えなかった。それは、中井が亡くなる前年の1951年に書いた「農村の思想」である。実際この小文は「メディアウムに支えられたミッテル」を明確に記していると解せるが、それ以外には「メディアウムに支えられたミッテル」を明確に記した中井の文献はみあたらない。美学論文や図書館論ではミッテル志向が貫かれ、出版論ではメディアウム志向が著しい、ないしは出版論では「メディアウムに支えられたミッテル」への傾向がみられると『出版研究』に載せた拙稿(後藤(1999))で述べ、また、後藤(2005)にもそれを再録したが、中井が出版論を書いたのは尾道市立図書館長になった1945年以降でしかない。彼の業績のメインストリームにあたる美学・哲学論文ではあくまでもミッテル志向が強い。

しかし、改めてこの「稲葉・杉山論争」を扱うことには意義がある。なぜならば、美学論文を読み返してみ

ると、そこでも「メディアウムに支えられたミッテル」を裏づける「読み」の可能性があったためである。

なお、木下長宏横浜国立大学教授（当時）は、中井がメディアウム、ミッテルを十分に整理していなかったと指摘し（木下 1995 174）、この問題の検討の非生産性を示唆する。しかしこの検討が中井を知る契機となると私は考えている。というのも中井の西田幾多郎評価ともこの問題は結びつくはずで、今回まだそこに及ぶ力量は私にないものの、この研究の遂行が、先にもふれた中村雄二郎のいう、西田哲学の批判的乗り越えとして中井を検討する作業に通じる見通しがあるからである。そのほか、北田暁大東京大学情報学環（東京大学新聞研究所の後継組織）助手（当時、現・同教授）は「意味への抗い」として中井のミッテル志向を肯定的に把握する論文を2000年の『マス・コミュニケーション研究』（『新聞学評論』の後継誌）56号に載せた（北田 2006）所収）。これは、中井の先駆性を識者に訴える目的に照らすと正しいが、私はそれだけに留まらず、「意味への抗い」というミッテル的媒介に徹することと矛盾する中井の側面や彼のそれへの躊躇もあわせてみていくことが中井の内在的理解には不可欠であると考えたい。

以上により、恩師たちが切り拓こうとしつつ未開拓の領域の研究を、私は追いつけている。

## 2. メディアウム、ミッテルの諸相

本章では本稿での議論の前提となるメディアウム、ミッテル概念の整理を試みる。

### 2.1 メディアウム、ミッテルとは

ここでは大まかな見取り図を提示する（表1参照）。この見取り図の根拠は後藤（2005）を始めとする私の

表1 メディアウムとミッテルの見取り図

メディアウムの	ミッテル的
媒介・媒介物・媒体	媒介する コミュニケーションする
モノ的	コト的
固定	流動
理論・体系	実践・素材
知識人	大衆
本	会話
安定的、自己肯定的	自己否定的
身分的	流動的
形而上学的	機能概念的
知識人と大衆の断絶	知識人と大衆の互換性
一方性	双方向性

諸論考であり、中井のテキストと照らし合わせた見取り図の再検討は今後も必要だが、今回はそれは概ね措く。ただし見取り図に収まりきれない内容は2.2で論じておく。また、先に1.で「稲葉・杉山論争」にふれたものの、中井の基本的スタンスは「メディアウムからミッテルへ」であることは間違いなく、それを前提に本節での説明を進める。

先に1.でも概要を述べたようにメディアウム、ミッテルはともに媒体、媒介、やりとりと訳される名詞ではあるが、メディアウムは中井に即していえば媒体、媒介物、一方ミッテルは媒介する、コミュニケーションすることで、ミッテルの方は動詞の名詞形として捉えた方が分かりやすい。メディアウムはより名詞的で固定的であり、ミッテルは動詞的で動きがある。いいかえるとメディアウムはモノ、ミッテルはコトとして、捉えうる。

とくに媒介概念には弁証法の「正」「反」が「媒介」して「合」になるという意味での媒介の意味もある。2.2で後述するが、中井はミッテルを、中井にとっての正しい意味での弁証法の媒介の意味にも扱う（他方、彼にとって正しくない弁証法の媒介がメディアウムである（後掲本文2.2の後半部および注7）12）参照）。そもそも弁証法（*dialectic*）という言葉自体が「対話術」（*dialektikē technē*）に由来する。したがって弁証法の媒介自体が、やりとりやコミュニケーションをも意味する。

なかなか動かない媒介がメディアウムであるとする、ミッテルは媒体・媒介物の固定性を乗り越え、動きが充分にとれる媒介である。

本や本に書かれていることの中身である理論や体系、そしてそれらの担い手である知識人に親和的であるのが、メディアウムである。一方、ミッテルとは本とは反対のものである。つまり理論に対しては実践、体系に対しては素材、本に対しては会話（情報の流通）が、それぞれミッテルに親和的である<sup>6)</sup>。

メディアウムは固定的な媒介であり、固定性があるから自らはその場に残っていられる。安心立命の媒介となる。他方ミッテルは固定性がない。自らを棄てる捨て身の媒介となる。つまりミッテルは自己否定的になる。自分の古い殻からの脱却が求められる。この意味でのミッテルを中井は「無媒介の媒介」、*Vermitteln* の *Mittel* と呼んだりする<sup>7)</sup>。

メディアウムは固定的なので、身分的であり、上下ないしは上中下がはっきりする。ミッテルは流動的であるので上下関係はなく境界も曖昧である。メディアウムを中井は場所的媒介ともいいかえるが、メディアウムだといわば場所が固定的で二分法は身分的に固定される。他方

ミッテルは二分法が相対的である。別の中井の表現でいうと前者は形而上学的で、二者の分離が明確かつ絶対的であり、後者は機能概念的である。この機能概念は中井のキーワードの一つであるので、これとメディウム、ミッテルとの関連は2.2で少し掘り下げる。

身分的、固定的なメディウムの場合、知識や情報の送り手である知識人は、受け手である大衆から影響を受けにくい。他方、身分的側面を否定し、流動的かつ自己否定的なミッテルの場合、送り手である知識人も受け手である大衆によって影響され、自己否定もするし、知識人と大衆の区別も固定的ではなく、役割を交換しうる。

したがって、中井が「メディウムからミッテルへ」としばしば唱えていることは、知識人と大衆、送り手と受け手の立場の互換性を主張することに通じる。よって、ミッテルの概念はコミュニケーションの双方向性、対等性の実践へと繋がっていく。中井は隔週刊新聞『土曜日』を事実上主宰し、読者の投稿で作られる新聞づくりをめざし、双方向性への実践活動のさなか、1937年11月、治安維持法違反の嫌疑で逮捕された。

このような双方向性、自己否定性による知識人の自己相対化は、三木清が独仏留学後の1926年に京都大学で行ったアリストテレス『メタフィジカ』読書会の大きなテーマであった学問の公共化の課題を引き継いでいる。三木は岩波書店の資金で留学したハイデルベルク大学において、若き哲学徒たちが自らの専門のことしか分からないアカデミック・フールに陥っている状況を危機感とともに見てとった。そこで、三木は帰国後、日本でも同様の状況になる危険を感じその防波堤として共通の学問的基盤を築こうと、哲学の古典的文献である『メタフィジカ』を京都大学哲学科の後輩らと読み合わせてきた(山田 1975 130-131)。そのように共通の学問的基盤を広げていくと、中井のいう「共通感覚」(コモンセンス=常識)にまで広がる。そのような共通感覚は知識人のもつ狭さを乗り越え、相互の共通項をみいだすことでまずはなされうるが、さらには知識人と大衆との共通の基盤を模索することで、より強く実現される。前者に関わる実践が中井においては『美・批評』(1930-35)並びにその後継誌の『世界文化』(1935-37)の刊行であり、後者に関わる実践が『土曜日』(1936-37)の刊行や戦後の尾道での文化運動であった。

さらにここで拙稿「中井正一の理論にみられる三木清『パスカルにおける人間の研究』(1926)からの影響について」(『図書館情報メディア研究』6巻1号、2008)での知見を導入する。三木の同書では「次元の相違」がキーコンセプトになっている。要は身体の秩序、精神の

秩序、慈悲の秩序はそれぞれ次元の違う秩序であって、身体の秩序で無限に物質的に豊かになり身体的に壮健になっても、精神の秩序にはまったく影響を与えず、ちっとも賢くはならないし、精神の秩序でいくら博識になっても、慈悲の秩序、つまり宗教的な高みには至れないという考え方である。これだけみると中井のいう知識人と大衆でいえば、絶対的な両者の隔絶、形而上学的分離に与するかのようである。しかし三木はパスカルやキルケゴールの改心(回心・転向、コンバージョン)をそこに介在させる。われわれは改心したとき、それまでの自分を否定し去り、自己否定的に新たなものへと変わっていき、古い自分からの脱皮を図る。このような三木のパスカル研究における次元の相違の議論が、中井のミッテル概念の背景にはあると拙稿では論じたが、その理解はいまも変わらない。

したがって、メディウムは媒介物(媒体)か媒介かという媒介物に近く、あえて媒介でいうと固定的な媒介であるのに対して、ミッテルは媒介物か媒介かという媒介に近く、あえて媒介でいうと流動的な媒介であるという、先程の本節での議論はその通りである。しかしながら、ミッテルも、そもそも流動的なところでの流動的な媒介というよりは、次元が違うほどに異質なものの流動的な媒介の意味があるといえる。ただしそういう本来固定的なものへの流動的な媒介の意味でのミッテルと、もともとから流動的なものへの流動的な媒介の意味でのミッテルとを、中井は使い分けていない。ただし中井がWirbelという言葉で否定的に述べているものに後者の事例が含まれている可能性もあるが、その点は改めて別稿にて論じたい。

以上を踏まえミッテルは自己否定的媒介であると纏められる。自分が他のものになり切る、捨て身の媒介こそがミッテルである。そうであるから知識人の自己否定としての大衆との対等性への議論に通じるし、知識人の専有物である本や理論の否定にも通じる、そして自己否定の契機として改心(コンバージョン)が存在するという論理構成になる。

なお、以上の説明でメディウム、ミッテル両概念については概要が示されているが、「メディウムからミッテル」と「メディウムに支えられたミッテルへ」については説明されていないので、2.3でその概略を述べる。その前に2.2ではメディウム、ミッテルに相関する実体概念、機能概念について述べておく。

## 2.2 実体概念、機能概念との関係

中井はカッシーラーに依拠して実体概念に対する機

能概念を強調し、機能概念の方に肯定的である。確かに「委員会の論理」(1936)等で一部機能概念に否定的な評価も示すが(門部 2014 119-120)、基本的には実体概念よりも機能概念をとという形で論を進める。また、戦後、中井は国立国会図書館に勤めてからは、これに「図書館」の文言を加えて、「[実体概念]としての図書館から[機能概念]としての図書館へ」というスローガンを盛んに唱えた。この図書館という語を付した実体概念、機能概念の対比はそのままメディアム、ミッテルに重なってくる。

というのも本などの媒介物、媒体、さらにそれらを取めた書棚、書棚を集めた書庫、書庫を集めた館＝建造物といった広い意味での媒体を重視するのが「[実体概念]としての図書館」であるのに対して、「[機能概念]としての図書館」は媒体よりも情報の流れを重んじ、読みたい本が読める、あるいはどこにいても知りたい情報が手に入りさえすれば、それは図書館の「機能」を果たすという考え方であるからである。つまり「[実体概念]としての図書館」は、本という実体物、媒体、図書館という場所にまつわるのに対して、「[機能概念]としての図書館」は、本という媒体、書棚という空間、図書館という場所の外枠を越えて、情報そのものの中身に照準を合わせる。「媒介」されれば「媒介物」は不要になる。

中井においてメディアム、ミッテル以上に頻繁に出てくるキーワードは、この実体概念、機能概念である。しかし両者が照応することを示した中井のテキストはほとんどない<sup>8)</sup>。とくに「[実体概念]としての図書館から[機能概念]としての図書館へ」というスローガンを中井は頻繁に唱えたものの、いずれも小文のなかでの発言であったこともあって、その関連性を中井は明示していない。しかし前段落の説明でその照応関係は分かる。

纏めると本や図書館という媒介物を崩さない媒介をするので、「[実体概念]としての図書館」はメディアム的、あるいは場所的媒介をする。他方、「[機能概念]としての図書館」は本という媒介物、図書館という場所を崩し、媒介、やりとりそのものをめざすのでミッテル的である。

つぎに「図書館」という用語を外した機能概念全般もみておこう。機能概念は特定の機能要素が100%ある極限状態を両極に想定し、それらAとBを極限と考え、現実の事例C、D、E、F、・・・はそれら両極の要素の複合体であるとして、それらの配分で捉える。両極においた極限概念と個々の事例との関係で事物を捉えていく。要はすべての機能がA、すべての機能がBの状態を極限として想定し、現実の個々の事例はそれらの機能

要素の複合として、複合比率で捉える。

「機能概念の美学への寄与」(1930)の以下の引用文では「窓」を例にして説明する。

「ジェイムズの重なりたる写真における表象におけるがごとく、多くの窓の記憶表象の重なりよりくる、忘却を通じての抽象化、すなわちその漠然たる一般的表象が〔実体概念における－後藤補記〕窓である。これに反して機能概念としての窓の表象は、照明、通風、展望度の三つの要素の複合としての構成体であることを示す。そのおのおのの要素のパーセンテージの増減によって、特殊の類型を生ずることとなる。そこに技術家の、いわゆる極限存在 *Existenzminimum* の概念が生ずる。極限的完全への問いとしての存在の考え方が生まれる」(全集1巻 p.174〔傍点中井、以下同様〕)。

この引用文の最後に「極限状態」とあるように、照明が100%の窓をA、通風が100%の窓をB、展望が100%の窓をCとすると、それらA～Cが極限状態となる。現実の窓はD、E、F、G、・・・で、それらは上記の引用文の「そのおのおのの要素のパーセンテージの増減に」による「特殊の類型」に相当する<sup>9)</sup>。

また「模写論の美学的関連」(1934)では次のように記される。

「例えば軍艦より大砲とか煙突とかの表象を忘れて、軍艦を攻撃、防御、運搬、居住の四つの機能<sup>フンクチオン</sup>の複合と考えるのである。すなわちこの四つの要素<sup>エレメント</sup>とその複<sup>コンプレックス</sup>合を考える時に初めて、軍艦の概念が一般に向って立つことができるのである。この四個の機能要素のパーセンテージの割合によって、戦闘艦、駆逐艦等の級、または型が出現するのである」(全集1巻 p.9)。

この引用文の場合は、攻撃、防御、運搬、居住それぞれの要素が100%のものが極的な存在で、実際の軍艦はこれら四つの要素の配分率がそれぞれ違ってきて、攻撃の要素が大きいものが例えば「戦艦」となる。

またこの「極限概念」は、落ちない飛行機とか死なない人間といった従来の論理学書では虚偽概念の例としてもにまで至るのだ、と中井は指摘している(全集1巻 pp.176-177)。

なお、以上の二つの引用は、双方共に「忘却」、「忘れ去ること」が引用の出だし部分にある。中井によると実体概念は忘却で成り立つとしてアリストテレスの類概念がその典型とされる。例えば「花」という類概念ならば、現実の個々の「花」の特徴を捨象することで、「花」という類概念が分かるが、結局それは個々の「花」の個別の特質を忘却・抽象することで成り立つ、さらに「植物」という類概念は「花」「野菜」「果物」等々の類概念

の個々の特質をやはり忘却して成り立つというのが、中井の実体概念批判の骨子である。そういう一般の表象に頼らず、それぞれの機能要素の複合として概念を構成するのが、機能概念であるが、それは忘却で成り立つのではない点で、実体概念よりも優れているとされる。

そして実体概念は形而上学的な二分法をとる。それに対して機能概念では、極限は二つないしは数個に分かれるものの、現実の概念は、その極限の機能要素の複合で捉えられる点で、形而上学的な二分法を否定する。「機能概念の美学への寄与」ではつぎのように記される。「そして形而上学的立場では、主観と客観、内界と外界との連続はついに不可能であるのに反し、この〔機能概念の——後藤補記〕立場では、主客は分離すべからざる函数的関係にしかすぎなくなり、一つの事柄が種々の論理的関係点の相異により、主観的とも考えられ客観的とも考えられうるのである」(全集1巻 p.170)。

ここの「主観と客観」あるいは「内界と外界」の二分法の否定、両者の連続は、「知識人と大衆」あるいは「送り手と受け手」の二分法の否定、両者の連続にも通じる。その点でコミュニケーションの双方向性の意味でのミッテルの媒介に親和的である。

というのも知識人が主に送り手である戦前のマス・コミュニケーションや学術コミュニケーションにおいては、通常は知識人がもっぱらコミュニケーションの送り手に、大衆が受け手に、役割も固定されていた。そのような状況下での知識人と大衆の連続性あるいは役割互換性は、送り手と受け手との役割交換、対等性、双方向性に、ほぼ等しくなるからである。実際、中井の活動に即していうと、1936年に隔週刊新聞『土曜日』を刊行したが、その実践はこの双方向性を示している。読書の投稿で作られる新聞を謳っていた『土曜日』は、大部屋俳優齋藤雷太郎が主宰していた『京都スタジオ通信』の権利を買い取って創刊された新聞で、小学校卒の齋藤と東京大学卒の弁護士能勢克男と京都大学卒の大学教員中井と一緒に編集にあっていた点で、知識人と大衆との連続性がそのまま送り手と受け手との対等性・双方向性に通じるという実践であった。このように知識人と大衆との二分法の否定、連続性の主張は、コミュニケーションの双方向性という意味でのミッテルの媒介へと通じる。

このように知識人、大衆も実体概念ではなく、機能概念として捉えれば、両者は連続するし、領域によって得意なところであれば誰しも知識人の役割を演じる。実際中井は「思想的危機における芸術ならびにその動向」(1932)において、専門分化の現象を指摘したあとにつぎのように大衆化について記している。

「このことは同時に奇妙な構造をもつ大衆化を構成してくるのである。すなわちそのおのおのの領域における専門家は他の領域において専門外、すなわち俗衆であることを生みだす。すなわちすべての専門家はすべての他の機能において俗衆である、という構造をもってくる。換言すればすべておたがいに俗衆であるという奇妙な構造をもってくることを生みだす」(全集2巻 p.45。〔傍点 は中井])。

つまり専門家=知識人が万能の物知りではなく、自分の領域のみに自己限定された存在となる。今日はこのテーマだから自分は知識人の「役割=function=機能」を果たす、明日はあのテーマだから大衆の「役割」を果たすという具合に、役割によって知識人・専門家であるにすぎなくなる。よって、受け手・大衆と連続的で役割交換もする。この点に限り、機能概念は、ミッテルの媒介に親和的である<sup>10)</sup>。

また先にみた形而上学的分離は、場所と場所とで分けることに通じる。知識人というカテゴリーと大衆というカテゴリーとを連続的ではなく、場所のように明確に分けようと捉える。分離されるだけでなく、上下に分かれる身分的關係も伴いがちである。例えば主観と客観の二分法と五段落前に記したが、ギリシア時代は「基体的主体」と客体とのあいだに明白な上下関係があった。「近代美と世界観」(1947)では次のように記される。「ギリシアの紀元前三世紀ごろの主客の関係は、一つの根底に動かないもの(ヒポケイメノン)があって、その上に多くの数多が関係をもっていたので、この主体は今基体的主体とよばれているところの主体であって、客体は、この主体の部分であったり、下級のものであったり、力弱いものであったりするのである」(全集2巻 p.146。〔( ) は中井])。

「Subjektの問題」(1935)ではsubjectumを意味する同じヒポケイメノン(hypokeimenōn, ὑποκειμενου)がつぎのように記される。

「アリストテレスではかくして、ὑποκειμενουの言葉は形而上学の最も重要な役割りを演ずることとなっている。それはすでに単により根底的なるものを指し示す空間的性格を越えて、変化に対しては不変なるもの、持続するもの、中間のものを指示して、積極性を帯びてくるのである」(全集1巻 p.27)。

つまり変化して対立するものが出てくるギリシア時代後期になると、もともと「不変なるもの」を意味する基体は、変化するものと変化しないもの、双方の対立を見据える「中間のもの」、中間者=メディウムへと変わってくる。「対立物がある場合、それは単なる反対するも

のではなくして、その根底に連続する基礎が必要である。・・・むしろあい反するもののあるところには、常に基体がなければならない。そのいずれも独立しているのではない。基体に付属してのみそれは対立しているのである。大小、長短すべてそうである」(全集1巻p.27)。

そしてこのような基体に付随した対立と中井の考える弁証法は対峙される。「かくて、基体的および実体的主体性が連続的同一性をもつとするならば、この弁証法的主体性は非連続的対立性をもっている」(全集1巻p.44)。

つまり主体、主観に相当する *subjectum* は基体であり、実体 *substance* にも通じる<sup>11)</sup>。ここでみた対立は中井の考える意味での弁証法の対立とは似て非なるもので、要は対立するもの双方が不変の基体に含まれるような対立は、非弁証法的で場所的であるのに対し、弁証法は「非連続的対立性をもっている」。対立するもの相互が連続していないからこそ、捨て身の媒介、ミッテルとしての自己否定的な媒介となるというのが、中井の全体像を踏まえた弁証法の媒介の主旨である<sup>12)</sup>。

このことから実体概念とメディアウムの媒介が親和的であることは確かめられる。しかし実体概念の対概念である機能概念が、そのままミッテルであるかという点、近い部分はあるものの、留保が必要である。という点もまず、中井が主宰したともされる<sup>13)</sup>『世界文化』の同人で中井講師の京都大学美学・美術史専攻での講義も受講していた物理学者の武谷三男は、戦後、自分のカッシーラー理解は「私の哲学の先生であり優れた美学者で、天才的な詩人である中井正一氏に負う処が多い」(武谷 1969 106) と述べた上でつぎの主旨のことを述べているからである。機能概念を唱えたドイツの人たちはファシズムに抵抗し、他方実体概念を唱えた人がファシズムに翼賛したのは事実だから、こういう考え方の相対的有効性は確かにあるが(武谷 1969 110)、実体概念なしでは物理現象を捉えきれず、物質を唯一の実体とする唯物弁証法も成り立たなくなる、と (ibid.)。中井がマルクス主義に距離を当初置きつつ、それを理論に取り込んだのか、最後までマルクス主義に距離を保っていたかは、『世界文化』同人においてさえ諸説あるが、機能概念のみでは弁証法が成立しないとの武谷の批判は『世界文化』の時代からあった可能性も高く、その点で、機能概念をミッテルと等置する発言を中井が控えている可能性は充分にある。

実際に A と B が隣り合わせに連続せずに両極としていて、実際の個別の事例 C ~ F それぞれは A と B の要素の複合であると考えれば、複合したもの C ~ F が A、

B の中間体か A、B とは非連続かさえ微妙なところもある。それを非連続ということは可能ではあるが、結局、C ~ F は A と B から予想されるものすぎず、飛躍や新たなものへと自己否定的に変わることにはならない。化学でいう混合か化合かでいうと、化合には飛躍があり、次元の異なるものになるが、混合は足し算の配合の違いにすぎず、機能概念はどちらかといえば混合の面がある。したがって「機能概念」としての図書館がミッテルと極めて親和的であるので、機能概念そのものもミッテルに一定の親和性はあるものの、それが弁証法の媒介のミッテルに等しいとは必ずしもいえない。

以上を別の言葉で纏めると、メディアウム、ミッテルを媒介物、媒介あるいはモノ、コトで捉える限り、それぞれ、実体概念、機能概念と同義となる。ただしミッテルには中井の考える意味での弁証法の媒介の意味もある。このことと機能概念はいくばくか一致しない。よってミッテルと機能概念はすべて合致するわけではない。ただしメディアウムと実体概念とは結びつき、それは弁証法に似て非なるものの媒介である<sup>14)</sup>。そしてそれに対するミッテルこそが中井の文脈での弁証法の媒介となる。

つぎに 3. で中井の芸術論の全般に「メディアウムからミッテルへ」が述べられている点を確認していくと本稿 1. で述べ、4. では「メディアウムに支えられたミッテル」の実例を確認しておくとも記したが、その前に「メディアウムに支えられたミッテル」の概略を以下の 2.3 で押さえておく。

### 2.3 「メディアウムからミッテル」と「メディアウムに支えられたミッテルへ」について

以上の説明でメディアウム、ミッテル両概念の概要が示されているので、両概念と「メディアウムからミッテルへ」については分かるが、「メディアウムに支えられたミッテルへ」については「メディアウムからミッテルへ」と違い、両概念が示されれば自ずと分かるものでもないのので、以下でその概略を述べる<sup>15)</sup>。

まず「メディアウムからミッテル」は、前掲表 1 の左の列から右の列のものへということで、簡単にいえば、理論から実践へ、知識人の秘匿的・自己完結的な体系から大衆への呼びかけへ、ということになる。よって専門の同じ知識人に閉ざされたコミュニケーションから専門外の知識人へ、さらに知識人仲間に閉ざされたコミュニケーションから、大衆に開かれたコミュニケーションへ、となるし、そのことは知識人の絶えざる自己否定となる。

さて、ここで「メディアウムに支えられたミッテルへ」

の説明であるが、この場合でも、基本的に理論から実践へ、あるいは、知識人と大衆との対等性という「メディアウムからミッテルへ」の方向性を大きな流れとしては否定しない。しかしこの流れには弊害もある。理論軽視で実践に突き進むのみでは結局、根無し草になってしまっただけで生産性がない。あるいは知識人の絶えざる自己否定、体系性の拒否ということで、その場その場で刹那的に新しい理論に向かっても、その人の座標軸が作られないと、結局、状況に流されるだけになる。つまりミッテルは体系性の拒否であるからといって、それを強固に主張し、体系や理論へのこだわりを拒み、座標軸をもたないでいると、結局は機会主義的になりかねない。

いいかえると、理論と実践との相互媒介が望ましい、そして「理論信仰」(丸山 1961)の知識人には理論を棄てて実践を、と呼びかけることが相互媒介に通じるが、逆に知識人でも大衆でも人びとが理論や体系を全否定するほどに薬が効きすぎれば、相互媒介はやはり不可能になる。

したがって「メディアウムからミッテル」であっても、基本的に基準となる体系となる学問を学び、座標軸をもち続け、理論と実践との相互媒介をせよというのが、「メディアウムに支えられたミッテルへ」の意味内容であると考えられる。

たとえば2.2でみたように、中井は図書館論において「[実体概念としての図書館]から[機能概念としての図書館]へ」と唱え、情報ネットワークさえあれば図書館はバーチャルに成立することを指摘し、現代の電子図書館やインターネット社会のようなものを予見した。しかしどこかに現物が存在しなければ、こうしたネットワークで成立する「機能概念としての図書館」も廻っていかない。実際、同時期、中井は出版論においてはむしろ実体志向で、古書価格の低下と紙不足に伴い、名著の多くが熔かされて低俗な本に化けていることを頻繁に嘆いていた。これら図書館論と出版論との矛盾する主張をあわせみることが、「メディアウムからミッテル」であっても、基本的に座標軸はもち続けよという主張に通じると後藤(1999)では述べた。理論の解体や堅固な枠としての本の否定を中井は基本的に唱えているが、それぞれの人の座標軸としての理論、それぞれのネットワーク化された情報のもととなる実物の本まで消え去ることは望ましくないと、中井は考えていた。

以上を踏まえ、つぎの3.では中井の芸術論の全般に「メディアウムからミッテルへ」が述べられていると本稿1.で述べたが、その実例を確かめ、4.では中井の芸術論のなかに「メディアウムに支えられたミッテルへ」の

記述をさぐる。

### 3. 中井の芸術論全般におけるメディアウムからミッテルへ

#### 3.1 「粋」

京都大学哲学科美学美術史講座教授の深田康算の亡くなった翌年1929年に京都大学哲学科に近世哲学史講座講師として赴任してきた九鬼周造は、日本を代表する美術史研究者岡倉覚三(天心)と幼少期より親子のように身近に接してきた人物だけに、講座は違うものの恩師深田亡きあとの中井の恩師の一人とされている。九鬼家は藩の家老職も輩出する名門士族出身であるだけに九鬼の代表作『「いき」の構造』において武士道における「いき」についても述べているが、町人階級の出身を誇りとしていた(武谷 1962 245)中井は、「いき」を町人階級が武士的な文化を否定するものとして描き出す。

「気質」(1932)において町人の好みとして「いき」が記される。「数寄好みが一般に武家的性格であれば、いき好みが一般町人的趣味であろう。そして武家で正しいことは町人にとって野暮であり、町人でいきなことは武家にとっては下品である」(全集2巻p.207)。

このように「いき」は町人に結びつくものとして描かれ、武家の趣味と対立するものとして描く点で、九鬼とは異なった「いき」観をもっているが、この1932年の論文においてはどちらが上かという、上下を問うニュアンスは一切ない。

他方、つぎにみる『日本の美』(1952)は中井最晩年の著書であるだけに、より踏み込んでいる。町人の「いき」を武士の「野暮」よりよいとするニュアンスがある。いいかえると「気質」ではいまみたように、「武家で正しいことは町人にとって野暮であり、町人でいきなことは武家にとっては下品である」と記され、武家でよいことは町人に悪いこと、町人でよいことは武家に悪いこと、評価の相対性、立場による価値の逆転が示されるのみである。武家の文化が上であると下であるといった、絶対的な優劣ではない。一方、『日本の美』では、数段落後の引用にみるように、町人文化の「いき」が、日本の美の源流にふれるもので、そこに接点を持ち、その発展に大いに寄与したという形で、町人の「いき」をプラスの価値のあるものとして描いている。

『日本の美』6は「文学-軽み・いき」とタイトルがつけられ、松尾芭蕉の俳句のめざす「軽み」が「いき」と根本精神を同じくするという論旨で書かれる。

芭蕉が旅をしたのは西行らに倣ってである。芭蕉は

西行の行動について述べた俳論のなかで、西行が先人の歌枕を訪ね、「自分のなかになまぬるくたまっているマンネリズムや、見てくれのマニエールを、きびしく批判し、切ってすてて、真にリアルな物の根底にまで追求め」(全集2巻 p.243) たのであると西行の行動について評する。そのような「自分のなかになまぬるくたまっているマンネリズム」から脱することを芭蕉の俳論では「軽み」と称す。それを中井は「いき」と結びつける。

「これは江戸の新しい精神「いき」の根底を流れるものであったのです。

この軽みは、それですから、決して浅薄なことではなく、すでに重たいものとなっている武士の気分を「野暮」として、それをぬけだし、脱出せんとする「いさぎよさ」とでもいべきものであります」(全集2巻 p.246)。

町人の「いき」を俳聖の俳論に関連づける。これだけなら価値中立を逸さないが、この6の最後はつぎのように結ばれる。

「かくして、江戸町人は、ついに万葉、古今、西行、世阿弥、雪舟、利休のもつ美の伝統を、かかる「いき」のかたちでうけつぎ、流動してやまざる清く新しいもの、浅き河の水の流れのごとき「いさぎよさ」、その「軽み」として再発見し、再成し、日本の根底を流れる美のすがたに一つの華をそえ、発展していったといべきであります」(全集2巻 p.247)。

要は自分の過去の殻を捨て去り、その意味で「流動してやまざる清く新しいもの」を求め続けるのが、「日本の美」であり、その典型が町人の「いき」である。それを中井は「日本の根底を流れる美のすがたに一つの華をそえ、発展していった」と肯定的に描く。これは自己否定的なミッテルの媒介に通じるがゆえに、積極的なプラスの評価が与えられているともいえよう。

同じ『日本の美』の、より前の方では伊勢神宮の遷宮にひきつけてつぎのように記すが、これも自己否定的なミッテルの媒介である。

「死んだものは汚れたるものであり、生きているという「しるし」、香り高い、みずみずしい、さかんなるもの、ひきしまったもの、<sup>とどろ</sup>滞らないもの、常に自分自身からぬけだして発展していくものを、彼らは「うるわしきもの」とよんだのであった」(全集2巻 p.227)。

さらに続けてつぎのようにもいう。

「かくして「うるわしきもの」であるためには、刻々、古めかしく、なずむものをたたきつぶすということ、かたくなり殻のようなひからびたものをぬけだすということ、じつとよどむものから、サラサラと流れ、動きはじめるということ、つまりはたらきそのもの、すなわち行

動が美しいことの条件となってくるのであります」(全集2巻 pp.227-228)。

中井の美学論文の多くは、このように自分の殻を打ち破る意味での自己否定、ミッテルの媒介を示すが、この『日本の美』はそれで一貫している。そこではこのように自己否定の典型を示すものが「いき」であるとされる。

### 3.2 射影と等値的関連

つぎに「射影」すなわちうつすことについてみる。

「芸術の人間学的考察」(1931) ではつぎのように述べられる。

「「見ること」はその本質の中に「うつすこと」をもっている。映す、<sup>うつ</sup>移す、<sup>うつ</sup>覆すなどにおけるがように「うつす」ということの内面には射影的等値的移動の意味が籠っている。「光」はこの射影の特殊な媒介であり、等値的換算機能である」(全集2巻 p.5)。

通常われわれは「みる」と「描く」を別のことと考える。確かに違いはある。しかし中井はまずは両者の共通項を指摘する。光で映像を眼という媒体に「うつす」。そのうつした映像をつぎに画布やスクリーンに「うつす」。漢字では種々の字が充てられうるが光を「うつす」ことにおいて、「みる」と「描く」は共通する。光は二方向を動くからである。続けてつぎのように述べる。「この「うつす」ことは、それみずから次のごとき二つの意味をもっている。所動的意味の「映<sup>うつ</sup>こと」と能動的意味の「映<sup>うつ</sup>すこと」の間には一つの方向の差異がある。前者においては「覆<sup>うつ</sup>す」におけるがように被投的意味が強いに反して、後者では「移<sup>うつ</sup>す」におけるがように描写的に投げ企てるの意味が籠っている」(全集2巻 pp.5-6)。さらに中井は「光に二つの方向を与えると考えたい」(全集2巻 p.6)と述べ、被投的な方向の光と投企的な方向の光の二つを想定し、前者は撮影機のレンズの光の方向、後者は映写機のレンズの光の方向であるとする(ibid.)。

また中井には「うつす」という論文がある。そこでも芸術の原型はうつすことにあるという。

「いわばうつすこと、それが水にもせよ、金銀にもせよ、銅金にもせよ、水晶体にもせよ、レンズにもせよ、うつすことその中に、芸術の始原的の原型が内在せりと考えられるべきである」(全集3巻 p.303)。続けてつぎのようにいう。「日本語でうつすことがそのまま移動の意味を構成するごとく、それは芸術の移入的等置的射影性を意味すると考えたい」(全集3巻 p.303)。

いわば対象をメディアに「移す」こと、移動が「う

つすこと」で、それが芸術の始まりであるという。

光に二方向あり、ともに「うつすこと」であるが、みる方向は撮影機の方向の光の動きであり、描く方向は映写機の方向である。このように光に受動・能動の二方向あり、「うつす」点では共通する。この意味で、みる立場である受け手と、描く立場である送り手との近接性を主張できる。要するに受け手と送り手の対等性、双方向性の考え方を、「うつす」ことという意味での光の二方向性の議論は導く<sup>16)</sup>。

### 3.3 基礎射影とミッテル

中井の晩年の代表作『美学入門』（1951）第1部5章は「射影としての意識」と題され、物事をうつすことを「射影」としてつぎのように述べる。

「いろいろの物事がうつり、耳に聞こえたのが、ちょうど、ガラスの部屋に光が陰をおとすように「射影」の陰を残すともいうべきであろう。かかる場合、身体とは、光、音、言葉、のいろいろのものを、無限にうつしあう鏡のいっぱいある宮殿のようなものと考えられるのである。そこで、意識といわれているものは、そのうつしあう、模写しあういろいろな光の交錯と考えられるのである」（全集3巻 p.111）。

五感それぞれの「光」にうつしだされた「陰」の交錯する場を意識であるとしている。

しかし『美学入門』のこの章では、単にうつしだされることと、もう一つ、それとは違い、否定的にうつしだすこととを、区別して論じる。いま引用したものがつぎの1と2のどれにあたるかは明示されないが、ともあれこれも、さらに3.2で述べたような単に光の二方向でうつすことうつされることも、以下の引用文での3ではないことは確かである。

「かかる考えかたをもって、意識の構造を顧みるならば、わかりやすく、これを分類してみるとすれば、次の三つのものに分かれるかと思う。

- 1——直接射影（反射）
- 2——上部射影（反映）
- 3——基礎射影（正射影）」（全集3巻 p.112）。

この3の基礎射影は自己否定的にうつしだされることを意味する。それに対して1の直接射影は「生理的な反射運動」（*ibid.*）で、通常行われている行動を意味する。2の上部射影は「意識して行動していると思っている」（全集3巻 p.113）、通常の意識作用を意味する。「それは、個性というよりも、学者が本のかびくさく、軍人が硝煙くさく、僧侶が抹香くさく、商人が銅臭を帯びるというのがすなわちこのことなのである」（*ibid.*）。いわ

ば専門家が単なる専門家、三木のいうところの「アカデミック・フル」に陥っている状態が示唆される説明である。その意味でこの2の上部射影は自己否定されるべきものとの位置づけであり、それゆえ3として基礎射影が用意されているといえる。「第三の「基礎射影」とは、自分が知っていると考えているものよりもっと深部で、自分にもわからない自分が、深く横たわっている」（全集3巻 p.114）。「自分が知っている」自分を否定して得られる「深部」の「自己」が「基礎射影」である。このような否定された自己は専門馬鹿ではないので、「うつす」行為も、以下のように否定的にうつされる<sup>17)</sup>。

「この世界に移された場合、歪んだ世界が、写真のように写されるのではなくして、その歪みそのものが、歪みとして正されなければならない形において、「深い否定の姿をもって」それは、写されていくのである」（全集3巻 p.114）。さらにこれは捨て身とも結びつけられる。「中国の山東の農人である善導のたとえ、火の河と、水の河の中に、あえて足をふみだすと、僅かであるが、四五寸の幅の、「白い道」が展げていくといういわゆる「二河譬」のような、戦慄をともなう行動への安心というか、捨身の爽やかさというようなものが、この世界との交渉の秘密をものがたっている」（全集3巻 pp.114-115）。

つまり「深い否定の姿をもって」自己否定的にうつす、そして「捨身の爽やかさ」というように捨て身を望む点で、この基礎射影はミッテル的であると評せる<sup>18)</sup>。

以上、本章で中井の芸術論とミッテルとの関連を確かめた。3.1では「いき」にみられる自分の過去の澱からの脱却という意味での自己否定のミッテル、3.2では対等性、双方向性の意味でのミッテル、さらに3.3では、ただ映された自己のなかの映像を否定的に捉えていく基礎射影の意味での自己否定のミッテルをみてきた。

## 4. 「脱出と回帰」等、少数の芸術論からみた「メディウムに支えられたミッテル」の論拠

本稿では「農村の思想」以外に、中井が「メディウムに支えられたミッテル」を主張したという説を支持するための論拠がないかと考え、それを美学論文に求めている。その最たるものがいまからみる「脱出と回帰」（1951）という『思想』（岩波書店）掲載論文である。

### 4.1 「脱出と回帰」から

この論文では最初の節である「一つの神話」で日本

神話からのたとえ話が説かれるが、娯楽が現実からの遊離からなるという、「遊離の学説」という二番目の節から実質の議論は展開していく。

「娯楽が、いつもテーマになる時、ある学者は、現実よりの切断、遊離、転換、放出、脱出を説くのである」(全集2巻p.156)と述べ、遊びや芸術についてのそれまでの諸説を概観・紹介しつつ、節の最後は「そのすべてが、常に、人間の実生活からの遊離と脱出を、テーマとしていることには変わりはないのである」(全集2巻p.157)と結ぶ。

「歪んだ推移」という節ではそのような脱出が芸術の本質であったのに、近代以前は奴隷が、近現代はいわゆるプロが、それぞれ芸術や娯楽の作り手となったと指摘する。そうなる結局、主君や娯楽産業に支配され日常からの遊離が仕事になる人にとって、娯楽はもはや遊離ではないし、利潤対象としての娯楽の享受者である大衆は娯楽中毒になり、娯楽の日常化も、もはや遊離ではないと指摘される。

しかしつぎの「回帰をささえるもの」の節はこの論文最後の節であるが、前節とは論調が一転する。ゲーテのディレッタントへの消極的言辞を手がかりに「旦那芸」を否定的に描く。

「尺八で首ふり三年ということがあるが、もし娯楽なる言葉が正当にまたはプリミティブに用いられるとすれば、この三年間が、一番楽しい時である。

「旦那芸」というのは、この首ふり三年が一生続く芸である。……自分のものがよく見え、聞こえてしようがない時である。しかし、それは、本人はそれでよいが、無邪気な大衆、専門家にとっては、そのほほえましさの程度、すなわち愛嬌を越えると、まことに娯楽の正反対のものになりかねないのである。つまり一人だけの娯楽なのである」(全集2巻pp.161-162)。

「旦那芸」をする旦那は、専門家と大衆のあいだの存在である。本稿2.で、形而上学的分離をすると大衆と知識人・専門家が分離させられるが、機能概念を唱える中井は、それらを連続的に捉えると述べたが、ここではいわば中間的な存在であるはずの旦那を、中間的であるがゆえに否定的に評する。その限りでいわばこれまでの中井とは矛盾する<sup>19)</sup>。

「この首ふり三年が、ともすると物のけに憑かれたように、その芸の中に沈んでいく時、旦那はそのために身を減すか、素人は、その芸の怖しさに戦慄するという瞬間に面するのである。この時、人々はディレッタントから蟬脱せしめられるのである」(全集2巻p.162)。

ここでディレッタントからの脱却が望ましいものと

して示される。

それは「自分自身が相手であり、自分自身が自分を弁護するにもかかわらず、それを裸にし、露わにして、闘わなければならない」(全集2巻p.163)と、絶えざる自己脱却を迫る。

つぎの引用文でみるように、結局アマチュアリズムに相当する「余技」の対極にこれらの人々は導かれる。「この人々には、もはや、余技としてやっていくには、あまりに全生活をそれによって闘わなければならない。自然に生活的に敗北することによって、芸自身を食うたつきとせざるをえず、そのことによって、さらに、その生活は悲惨さを増すことになるのである」(全集2巻p.163)。「余技」でなくなると「生活は悲惨さを増す」と記され、ここだけみると「余技」を肯定するように読めるが、結びにかけてのトーンは違う。「余技」から脱することが論文タイトルにある「脱出」であり、望ましい。

余技、旦那芸から脱出したものの境地を「ほんとうの悦楽」と中井は評する。「いかにしてか食い続けて、十年二十年の後に、ようやく何らか会得することのある時、彼らは、もはや、何かが悦楽であるといって彼らの前に出されても、彼らは、ほんとうの悦楽が何であるかを彼が選んだもの以外には耳をかたむけようとはしないであろう」(全集2巻p.164)。

ほんとうの悦楽を知った人とは、2.1でみた三木清の『パスカルにおける「人間」の研究』に即すと、高い秩序、要するに「慈悲」の秩序に到達した人に相当する。先にも述べたが、次元の相違があるので、「身体」の秩序でよいとされる健康や物質をいくら向上させても「精神」の秩序に入れないし、「精神」の秩序でよいとされる知識をいくらえても「慈悲」の秩序に入れない。逆にいえば「慈悲」の秩序の住人は知識を差し出されても嬉しくはないし、「精神」の秩序の住人は物質を与えられても満足はしない(後藤2008a 29)。「低次の無限なる大は、それが低次のものである限り、高次の無限なる大に対しては無に等しい」(三木1980 121)。「聖者は学問上の発見をしたこともなく、また国を支配したこともないのである。身体的なるもしくは精神的なる大いさは彼には関係がないのである」(三木1980 131)。それぞれのカテゴリーの人びとの喜びの次元は質的に違う。よって本当の悦楽を知った人は、「ほんとうの悦楽が何であるかを彼が選んだもの以外には耳をかたむけようとはしない」。

さらにこの引用部分から三段落後ろの箇所、論文全体の最後から三段落目の段落では、「脱出」が高らかに称揚される。

「この自分を乗り越えて、肉体中にもひそむ、宇宙の秩序を追求し、自分自身を探求するために、一分のすきをも自分にゆるさない練習を続けている、「見られる人々」の魂の中に、それが、野球の選手であったとしても、見てくれの自分からの、脱出から脱出を貫いて、ついに、人間への回帰を約束するところの、回帰をささえる道が、そこにつながっている、といえるのである」(全集2巻 p.164)。

「見てくれの自分からの、脱出から脱出を貫いて」とか「自分を乗り越えて」という表現からも、これが自己否定をいっていることは確かで、その意味でミッテルの典型ではある。

ミッテルの典型ではあるが、素人、アマチュア、余技、旦那芸を否定し、孤立無援で我が道を行くいわば「道」としてのミッテルである。専門家と素人、知識人と大衆、送り手と受け手が連続的で役割交換できる意味でのミッテルとは反対方向に向かっている。知識人としての自己否定が素人との一体化の方向に向かうのは、ナロードニキや東大新人会等、左翼知識人お決まりの思考パターンである。しかし同じ専門家であっても芸術家にとっては、自己否定は素人の方向に向かうよりは(そちらの方向もありうるが)、素人であるかつての仲間たちから少しずつ離れ、絶えざる自己研鑽を、という方向も多い。その場合、自己否定の意味ではミッテルであるが、素人との対等性の意味ではメデイウムのになる。

いいかえると(芸術以外の)通常の文系学問や社会の領域においては、ミッテル志向が難なくいえるが、芸術領域においてはとくに送り手を意識する局面では専門性のあるミッテル、いいかえると「メデイウムに支えられたミッテル」が志向されやすい<sup>20)</sup>、そしてその延長線上で、例外的に芸術以外の領域でも「農村の思想」においてそれが標榜されたとみることもできる。

ただここには受け手と送り手の問題がある。政治社会の問題に関わる学問に関連する領域であると、訓練された人のみが送り手であるのは理念上も望ましくない。誰も政治的な判断ができ、その判断にもとづき発言するのが、民主主義の基本とされる。他方、芸術の場合、誰もが送り手という芸術論は多くあるが、それが現実化されると「騒音」だらけになる。中井もその辺りの矛盾には気づいていたのか、この論文の結びは受け手の一つである「競馬ファン」に託して次のように記される。「たとい、競馬のファンでさえ、その悦楽の底には、かかる本質への回帰を、はるかなる意識の奥底にもっているのであるが、帰り道のアリアドネの糸を、ただ見失っているのである」(全集2巻 p.165)。

## 4.2 「農村の思想」

杉山光信が「メデイウムに支えられたミッテル」の論拠とし、後藤(2005)もそれを支持した1951年10月の「農村の思想」はつぎのように記される。

「〔農民には－後藤補記〕・・・思想としての体系的基盤が欠けているのである。すなわち「思想」ということにふさわしい地盤、媒介(メデイウム)が、魂の中に未だ成立していないのである」(全集4巻 p.151。( )は中井)。

ここの引用文では「思想」の「体系的基盤」(「地盤」と「媒介(メデイウム)」が、同格を意味する「、」で結ばれ、ほぼ等しいとされる。そしてそういう思想の体系的基盤であるメデイウムの欠けている農民を批判的に捉える。ではここで中井のいう「思想」とはどういうものか。「思想」の意味は、この文章の四段落あとで、より明確に示される。

「自分が自分の矛盾を自覚するためには、自分が自分をひとまず押しやって、それをながめるところの批判が必要なのである。その批判をするためには、魂の一つの広間が必要なのである。この広間のことを、人々は「思想」というのである。「・・・主義」、「・・・思想」というのは、この広間のことである。この広間を農民はいまだ一度ももったことがない」(全集4巻 p.152)。

要するにここでの「思想」とは、自分をひとまず押しやって客観的に眺めるための体系的思想を意味する。これら思想のおかれていた「広間」に杉山は注目し、「メデイウムに支えられたミッテル」を志向していると論じる。「自分が自分の矛盾を自覚する」というのは、矛盾を自覚し、新たな自分になりかわっていく、ミッテルの媒介をすることであるが、そのためには、「・・・主義」という体系的思想を「広間」におき、そこからの距離を測り自己否定や体系の否定をする必要があると杉山は解する。したがって、ミッテルを可能にするための思想、いいかえると「メデイウムに支えられたミッテル」の「メデイウム」部分であるところの思想が、ここでの「思想」である。

「・・・主義」、「・・・思想」というのは、ある種の専門性というか一人の思想家、一つの思想集団への専心を求めることであり、アカデミック・フル批判をした三木の公共圏の流れを汲む中井の基本的な問題意識とは違ってくる。知識人の体系や論理の硬直性を解体しようとし、ミッテルの媒介を唱えた中井の基本姿勢とずれる<sup>21)</sup>。

しかし知識人の側が自己否定すれば、大衆へと向かい、自らの理論や体系の自己欺瞞性を批判するが、で

は、大衆の側は自己否定しなくてよいのだろうか。大衆の側も自己否定して初めて双方が歩み寄るとすれば、大衆の主義のなさ節操のなさからの脱却が、自己否定の一つの形として、大衆には求められるという理屈も成り立つ。

また先に2.1後半でもふれたように、ミッテルは対等な媒介ではあるが、本来異質なものを対等とみなして、異質なものへの乗り越えを図る意味での対等な媒介をするからこそ、そこに自己否定のエネルギーが生じ、相互の認識が発展する。他方、そもそも異質ではない対等なものに対して、対等な媒介をしても、そこに自己否定のエネルギーは必要ない。大衆の側からすると自分らと知識人との違い・異質性は、専門性から来る、あるいは教条主義的には凝り固まらずとも、一定の主義から来る、固有のものを見方を大切にする点にあるであろう。

この意味で大衆社会化する状況のなかで、「メディアウムに支えられたミッテル」には一定の有効性がある<sup>22)</sup>。

このような「…主義」、「…思想」あるいは「広間」をつくるといった専門性、ないしは専心の必要性和、前節でみた「脱出と回帰」の芸の道を究める方向とは、相通ずる。

つまりミッテルは2.1や3.の終わりで確認したように、自己否定の意味と対等性の意味があり、両者が乖離せず矛盾しないケースが多く、その場合にはミッテルをひたすら追求すれば済むが、両者が乖離することもある。その場合、自己否定の部分は対等性と逆の方向に赴く。要するに、「脱出と回帰」でみた芸術であれば孤立無援の芸の道、「農村の思想」でみた学問・思想であれば体系を据えた「広間」の形成に向かう。それらは対等性の意味でのミッテル概念からすると、対等性と逆行するのでメディアウム志向といえる。しかし「広間」も自己否定の基盤としての「広間」ゆえメディアウムに留まらずに、あくまでも「メディアウムに支えられたミッテル」になる。

#### 4.3 その他の芸術論からの補足

以上の知見を補足するため、他の芸術論でも類似した箇所があるので、それらを瞥見する。

##### 4.3.1 「絵画の不安」から

1930年の「絵画の不安」ではつぎのように記される。

「ただ見ればよいのである。人だかりの中に何でもよい首をつっこみのぞき込む思想の・・・芸術の・・・散歩である。思想のショーウィンドののぞきである。そこには存在への執着もなく、強い把握もない。好奇は常に

すべてに対して興味をもつとともに、しかも何のものにも執しない」(全集2巻 p.171 [このの…は中井による])。

このくだりはまさに「農村の思想」で「広間」、「メディアウムに支えられたミッテル」を主張するきっかけの部分に照合する。

この論文は出だしに「真に在るものは不安の上にある、というハイデッガーの考えかたは何ものか深いものがある」(全集2巻 p.169) という文章をおき、逆に「不安なき世界」をハイデッガーのいう「饒舌の存在」(全集2巻 p.171) と位置づける。そのうえで「真の自分の姿は永遠なる「問い」の上にある」と述べ、さらに「言葉の上に、光の上に、音の上に人は問いを、問いの上にまた問いを重ねる」と記される。つまり、真の自分の姿を求めて問いを重ねるという点での、自己否定が根底にあるといえる。そのような文脈において、「饒舌」で「何の本質凝視もなく」「すでに語られたることについてのおしゃべり」を批判的に描くなかで、上記の引用文が示される。

この論文はタイトルからして絵を描くものが、そういうハイデッガーのいう「不安」をもたないと、「饒舌」でない、ほんとうの絵が描けないという趣旨で書かれている。要するに、絵画の受け手ではなく描き手の立場に即した議論である。絵を描く者が他の人の思想や芸術を覗き込む好奇心を批判している。絵を描く送り手がまず思想書や芸術作品といった情報の受け手である段階での執着、こだわりを求める。その点で「農村の思想」や「脱出と回帰」と同様の立ち位置になる。というのも一つの「思想」を究め体系を身につけつつ、その立場から種々の「思想」をみることが、「農村の思想」の「広間」であったのに対して、ここでも、「思想のショーウィンドののぞき」を否定的に捉え、一つの「思想」や「芸術」への執着、こだわりが望ましいとされるからである。「思想のショーウィンドののぞき」の反対の極に、こだわり、専門性と一つの体系への傾倒、いわば「農村の思想」における「広間」の形成に近いものがあると考えられる。

真の自己の存在を求めるため、問いを重ね、そのつど得られた自己の姿を否定していく。その点でミッテルを基本としているが、反面、一つの専門や体系へのこだわりも求めているのである。

また、この論文が1930年に書かれた点も着目したい。杉山は中井最晩年の「農村の思想」で「メディアウムに支えられたミッテル」が示されていることから、中井が前半生「メディアウムからミッテルを」を唱えつつ晩年「メディアウムに支えられたミッテル」に変わったという議論の進め方をしたが、若い頃から矛盾する両者の主

張が併存したことが分かる。しかも杉山は中井のハイデッガーからの脱却を「メデイウムに支えられたミッテル」への変化の理由の一つに挙げるが(杉山 1983 196; 200)、ここではむしろハイデッガーを支えとして論が展開する。

#### 4.3.2 「リズムの構造」から

1932年の「リズムの構造」ではつぎのように記される。

「個人の発見は科学が導きだしたものであり、カントがその成立を立証せんとしたものである。

個人の自己分裂は、すでに自我の概念の成立とともに始まっている。フィヒテがその楯杆となったところのものである。個人の成立はその誕生の日にすでに否定の槌の下においてなされている。それはイロニーであり、それは動座標軸的な一つの動きのほかの何ものでもない。

かかる滑べれる地盤の上に成立する思想的建造物は、一歩その目標をあやまれば裂傷を受ける。今のいずれの思想がその傷めるものを嗣がないといえよう(全集2巻 p.35)。

ここでは個人の成立と個人の自己分裂が同時に起こる逆説的状况を指摘する。その状況を「イロニーであり、それは動座標軸的な一つの動き」と評する。この「動座標的」という言葉を中井は、「芸術における媒介の問題」(1947)ではミッテルと随伴してつぎのように肯定的に扱う。「クルト・レヴィンの研究にも見られるごとく、記憶(あるいは広い意味での知覚)が静座標的な射影要素(エレメント)であるのに対して、意識は、一つの方向に向って、それらのものを動座標的力点として、射影契機(モメント)として、主体的な現実行動態に転化する。メデイウムの媒介性より、「機」としてのミッテル的媒介性に、みずから転化せしめるところのものとして、みずから論理的機構をもっていることと成るのである」(全集2巻 pp.124-125 ( )は中井)。この引用文での「動座標的」はミッテルの典型とされる射影契機としての意識と結びつくものとして、メデイウムと結びつく「静座標的」と対比され、「主体的な現実行動態に転化する」ものとして肯定的に評する。他方、いま本4.3.2項で検討中の「リズムの構造」では、この「動座標的」を「滑べれる地盤の上に成立する思想的建造物」と否定的に評する。これは「農村の思想」における「…主義」、「…思想」のある「広間」を求める主張と呼応する。「滑べ」らない、「静座標的」な「思想的建造物」の構築を主張することになるからである<sup>23)</sup>。

## 5. 結論と考察並びに今後の課題

本稿の結論は一文で記せば、中井正一が「メデイウムからミッテル」を唱えたか「メデイウムに支えられたミッテル」を唱えたかという稲葉と杉山の中井理解の相違に関して、後者の決定的な論拠として「農村の思想」(1951)しかこれまでなかったが、今回、中井の芸術論を読み返すことで「脱出と回帰」(1951)等にも「メデイウムに支えられたミッテル」を裏づける記述をみつけ出した点に尽きる。

なお、杉山は「メデイウムからミッテルへ」と「メデイウムに支えられたミッテル」を時期による相違と考えたが、「脱出と回帰」のみであれば、「農村の思想」と同じ年の著作で、杉山説の強い裏づけとなる。しかし1930年の「絵画の不安」等にも同様の記述があることから、時期による差という理解は必ずしも妥当でない。他方、後藤(2005)は時期による相違を全否定はできないが、それよりは主題領域のジャンルによる違いが大きいと考えた。そこでは大まかに美学系の論文は「メデイウムからミッテルへ」、出版論系の論文は「メデイウムに支えられたミッテル」であるとした。しかし今回美学系の論文に「メデイウムに支えられたミッテル」の論拠を求めた。ジャンルによる相違という後藤(2005)の見解は出発点からして今回、妥当性を欠く。

結局、中井は時期やジャンルの差異と無関係に、論文によって「メデイウムからミッテル」を主張し、論文によって「メデイウムに支えられたミッテル」を主張した。

以上が本稿の結論である。

次に今後の課題を導く意味も籠めて考察に移る。

以上の結論の限りでは中井は矛盾の人、ということになる。しかしジャンルでも時期でもないとして、何らかの双方への分岐の原理がありうる。それを探りたい。

そこで一つの解決の方向性としてミッテルに二種類あり、さらにその片方のミッテルに二つあると考えたい。まずミッテルが自己否定、自己否定的媒介である点は二種類のミッテル双方に共通する。そこで自己否定をする主体が知識人・インテリか、素人・大衆かで分ける。この主体の違いが大きくミッテルを二種類に分かつ。この自己否定をする主体が知識人・インテリであると、そこでのミッテルは大衆との対等性をひたすらめざす。したがって体系、理論、本を解体する方向へと向かう。他方、自己否定をする主体が素人・大衆であると、自己否定の連続が鍛錬となり、その場合のミッテルは違う次元のものへと向かうこととなる。これら主体の違いで大き

く分けた二種類のミッテルのうち、二つ目の自己否定する主体が素人や大衆のものとして、「脱出と回帰」も「農村の思想」も位置づけられる。そのなかでも素人の芸術家からプロのそれに向かうのが「脱出と回帰」のケースであり、農民から教養人・知識人へと向かうのが「農村の思想」のケースである。これらが本稿の本段落最初の文章で「片方のミッテルに二つある」と述べた、それぞれに相当すると考えられる。つまり「脱出と回帰」は芸術・スポーツ分野、「農村の思想」は学問分野という形で、分野によって分けうると考えたい。

まず中井自身が知識人であるので、彼の著述の大部分は、大きく分けた二種類のミッテルのうちの前者、つまり大衆との対等性をひたすらめざす方向のみを論じる。他方、後者を「メディアムに支えられたミッテル」と杉山は述べ後藤（2005）もその表現を踏襲した。そこでは素人であるがゆえに、自分らにもちあわせのない「体系、理論、本」というメディアムを求めていく、「自己否定的媒介」という意味でのミッテルが、まず最初に来る。よって「メディアムを求めたミッテル」が先行し<sup>24)</sup>、それによって「広間」が形成されてのちはじめて「メディアムに支えられたミッテル」になると考える方が正確であろう。なお、詳細の精査は今後の課題であるが、「広間」に「・・・主義」をおく場を設けることには、共通感覚＝常識形成のための教養主義なのか専門性の追求なのかという問題<sup>25)</sup>も、この「広間」形成の途上ないしは過程には関与しう。

以上の中井自身の気づかないロジックを若干介在させないと、1948年の「地方文化の問題」で「私には、そのころ、弁証法の「媒介」の問題が、ミッテルとメディアムの問題が解けきれない課題として、私を苦しめていた」（全集4巻 p.185）という中井自身を悩ませた難問は解けない。

つぎに以上の考察を踏まえた展望を今後の課題をみすえて述べておく。大きく分けて二種類あるミッテルのうち、自己否定をする主体が知識人・インテリであるミッテルの場合、ミッテルは最初は異質なものの相互が対等性をめざす媒介といえるが、次第に異質性が薄まり、対等な者相互の対等な媒介となっていく。他方、自己否定をする主体が素人・大衆であるミッテルの場合、「脱出と回帰」のように芸術・スポーツの分野であれば、次第に周囲との異質性を深めるし、「農村の思想」のような学問分野であれば、当座は追いつくまで平準化する部分であろうが、次第にまた個別の学的素養の意味での異質性がふえる。考えてみると、この異質性を前提とした対等性の追求の方向でないと、共通感覚をもつ意味も少

なくなる。なぜなら異質性を理解し、自分の視野を広げていくことにその主眼があるから、そもそもが平準化、同質化された世界ではそういう要請そのものがなくなってくる、あるいは意義が薄くなっていくからである。

つまりこのようなミッテルは本稿2. 1の終盤に記した、中井が否定的に「弁証法もどき」に対して用い、そして恩師深田が西田幾多郎を否定的に評価する際に洩らした言葉（全集1巻 p.350）、Wirbel（低徊趣味）<sup>26)</sup>に相当する可能性がある。この辺りの中井における弁証法と弁証法でないものの区分けや西田幾多郎評価と、今回の主題であるメディアム、ミッテル問題は密接に絡む。この間の事情の緻密な検討を次稿以降の緩やかな課題としたい。

## 注

- 1) 後藤（2006）に依拠して原稿受理日にはこのように記したが、若干誤りがある可能性が判明した。私が会長を務める思想の科学研究会では現在、過去の会員名簿を総点検し、会員総名簿を作る作業をおこない、このたび草稿が完成した。その作業において会の最初の会員名簿は、『思想の科学』1951年4月号（第1次6巻1号）に公表されている会員名簿であると判明したが、そこには多くの『世界文化』同人とともに中井の名前が記されていた。つまりこの記録によれば中井の友人の多くが会員であっただけではなく、中井自身も会員であった。ただ、私は19歳のとき亡父に強制的に中井の著書『美学入門』を読まされ報告させられたが、思想の科学研究会の事務局長や会長代行を務めた父からその際も中井が会員であることは伝えられていないし、後藤（2006）の載った媒体（『コミュニケーション科学』）の当該号（24号）は、思想の科学研究会元会長田村紀雄教授の東京経済大学退職記念号で、思想の科学研究会の実質上の主宰者である鶴見俊輔も「戦中から戦後」というタイトルの論文を寄稿しているが、私の記述が間違っているとの連絡を田村からも鶴見からも貰ってはいない。『思想の科学』6巻1号 p.3に「思想の科学研究会々員」というタイトルのページで（表紙にある目次によれば「会員名簿」）氏名のみ記載の名簿が載っていて、約120名の名前がほぼアイウエオ順に並んでいる。しかしどういふ訳か中井正一の名前は、な行ではなく、は行の羽仁五郎、服部之総のつぎに来ている。羽仁は中井を国立国会図書館館長（実際に就任したのは副館長）に推した人物で

あるし、服部については服部が京都に来るとき、よく中井宅に寄っていたと久野収が証言しているが、二人とも講座派マルクス主義の代表的人物とされている。名簿の中井のつぎにでている氏名は波多野完治である。

- 2) 論争が起きた訳ではなく一方的に杉山が稲葉に挑んだもので正確には「稲葉、杉山の対立」と表すべきともいえるが、中井も著書で言及している西田・田邊論争にちなみ、こう表す。同じ大学同じ部局の著名な先輩教授に挑み、挑まれた御大は黙殺した(全集1巻 p.353) 先例であるが、これも通常「論争」と称されている。
- 3) 三枝は戸坂と非常に親しいが、他の3名と違い東京大学哲学科出身で西田の教えを受ける機会がなかった。「技術」や「気」の問題等、中井と共通する関心領域もある人物である。
- 4) 西田の「場所の論理」の「場所」とは矛盾するものが包摂される場所であり、「絶対矛盾の自己同一」の成立する場所である。対立するもの相互も対立によって止揚されるものも内に含むような弁証法が、そこでは成立する。西田は当初、超越的主語面を突き詰めようとして、主語になって述語にならないものを追求したが、その後、転じて、超越的述語面を突き詰める方向になり、述語になって主語にならないものをめざした。述語は主語を包摂する。そのような包摂を繰り返していくと究極的には一般者にいたる。それが場所であるという。なお、戸坂も三木も中井もこのような西田の弁証法を、それぞれなりの観点で批判している。しかしそれらの批判と彼らが志向した共通感覚論とを結びつけると、西田との繋がりがみえてくると、中井の示唆にしたがいつつ、私は見込んでいる。なお、場所の論理の私の理解の詳細は後藤(2008b)の注(9)参照(後藤2008b 34-35)。
- 5) 『中井正一全集』美術出版社、全4巻からの引用は、以下(全集○巻 p. △△)の方法を採る。
- 6) 「言語」(1927, 1928)「委員会の論理」(1936)等の著作が、ソクラテス等の語り、口頭コミュニケーションでの弁証法から、ヘーゲル等の意識の中での、あるいは印刷された言葉での弁証法への変化を追っている。いわばメディウムの媒体の多い状況での弁証法という意味でのミッテルの媒介の可能性を逆説的に探ろうとしていると評せる。
- 7) この *Vermitteln* の *Mittel* の訳は「無媒介の媒介」である。例えば「回顧一〇年」(1951)ではつぎの

ように記される。「そして、その空白は、「媒介」なる概念が *Medium* か *Vermitteln* の *Mittel* かを問うているところの、巨大なる疑問符をものがたっている」(全集1巻 p.355)。ここの「空白」とは西田・田邊論争での西田の沈黙を意味する。田邊の「無媒介の媒介」は当時京都大学哲学科に学んだ者の多くが憶えている単語でもある。山田宗睦は『戦後思想史』で敗戦時について「そのころのわたしをとらえていた田辺元の認識カテゴリーでいえば、種と個との無媒介の媒介が、わたしの精神と存在の構造だった」(山田1959 9)、「復員の途中でわいてきた、種と個との無媒介の媒介という体系が、はたしてむなしかったのかどうか、という問いにとらわれていた」(op.cit.25)と述べている。第六高等学校での中井の講義を三年間も聴き続けた詩人・美術評論家の栗田勇は、「西田哲学の場合はメディウムに過ぎない。実体的なもの」と中井は評していたと語り、「田辺元はあるところまでメディウムではなくてミッテルとしての弁証法を追求して、そこで挫折したというのです」(鶴見ほか1963 81)と証言している。西田ではなく田邊寄りの中井の立ち位置と彼のミッテル志向は相関する。

- 8) おそらく唯一の例外は「委員会の論理」3に記された文章である。これについては注14)で引用する。
- 9) マックス・ウェーバーのいう理念型と、ここの極限は似ている。ウェーバーの場合も両極に極限を想定し、現実はその要素の配分の比重で捉えている。
- 10) なお、中井自身がこの前後の文脈においてこの知識人のアカデミック・フルな状況を肯定しているのではなく、あくまでも三木の学問の公共化の関心を、ここで引き継ぎ、否定的に評している。
- 11) 「すなわち *Subjekt* はすでに *Substanz*, *Substrat* の意味から分離してきたのである」(全集1巻 p.35)。したがってこの時代(カント時代)以前は、両者は結びついてきたことになる。『社会科学大事典』の「実体」の項目では中井研究者として知られる鈴木正が「もとの意味は *sub* (下に) と *stance* (ある) がむすびついてきたもの。・・・そのものをそのものたらしめる基体(*Substratum*)という意味になる」(鈴木1969 154)と「実体」と「基体」の近さを指摘している。
- 12) 連続的なのが西田の弁証法だという。「三木・戸坂両君を憶う」(1946)でつぎのようにいう。「考えれば西田博士自身ほどその学説が一生の中に、その装いを脱離発展した人も少ないのである。博士自身が

矛盾と自己同一の過程の中に移行した人なのである。博士はそれみずから現象学的地盤に立ち、むしろ最後まで立ちつくされた人ではあるまいか。しかし博士は弁証法を口にするを中期以来好まれたのである。そのことが博士の弁証法の否定の「媒介概念」をしてミッテルの概念によるのではなくして、現象学的メディアウム（媒体）の概念に依存せしめる原因となったのである。

弁証法の媒介概念は対立闘争の契機である。思惟体系の中にエーテル的媒在として意識反省の中に起伏するものではない」（全集1巻 pp.22-23）。なお注7）で、西田よりは中井が肯定的に評する田邊の場合、中沢（2011 114）によると、田邊は外延的対立と内延的対立を区別したという。前者が中井の表現ではメディアウム、後者がミッテルに非常に近いと考えられるが、精査の詳細は別稿に委ねたい。

- 13) 後藤（2014）で記したように『世界文化』での中井の主導性は怪しい。
- 14) 「委員会の論理」3でつぎのように記される。「彼（ヘーゲル）が弁証法をフリードリッヒ・シュレーゲル、ゾルゲルなどのイロニーから分かち、シェリングの汎神論よりみずからを区別するところのものは、一度ピストルより発射されたら永遠に飛行をつづける弾丸にも似た実体概念に対して、主体性の弁証法は常にみずからを否定の媒介とするところの、分裂発展の過程的媒介であることである。媒体（メディアウム）の中の要素（エレメント）ではなくして、常にみずから二つに分裂する契機（モメント）をもつところの否定的な媒介（ミッテル）であることである」（全集1巻 p.62 [最初の括弧は後藤補記。それ以外はルビを（ ）に入れた]）。ここでは「実体概念」と「メディアウム」の結びつきは明示され、その対立項に「ミッテル」が置かれている。ただし「ミッテル」と結びつくのが「機能概念」であるか否かは記されていない。
- 15) 「メディアウムに支えられたミッテル」は正確にそれが記されていると想定できるのは、1. で示したように、本稿で新たに追加するものを取りあえず措くと「農村の思想」（1951）のみである。それについての解説は本稿4.2の本文で記してある。よってここで「メディアウムに支えられたミッテル」の概略を示す場合に、「メディアウムに支えられたミッテル」という方法的概念を使ってどのように「農村の思想」を分析しようとしたかという杉山光信の方法意識やそれを踏まえて論を展開した後藤（2005）の方法論

が自ずと混ざってくることは否めない。杉山（1983）はそのなかに中井についての論文のみならず、丸山真男についての長大な論文も収めていて、基本的に著書のタイトルにある「戦後啓蒙」を肯定する立場を示している。それを引き継いでいるので、以下2.3で示す私の記述も丸山が中井を分析したらこうなるであろうというような意味での丸山寄りの中井解釈になることは否めない。

- 16) この二方向に方向転換するものが中井によると技術である。そして技術には修練によってえられるものと、技術革新によってえられるものがある。前者は本稿3.3の基礎射影や4.1でのテーマに通じる。
- 17) この三つの射影の出てくる別の論文は「模写論的美学的関連」（1934）である。ただし同論文でこの三つを併記する箇所では、基礎射影は「3基礎射影（模写）」と記され、括弧書きが『美学入門』の「（正射影）」と違って「（模写）」となっている。同論文は1、2の説明に多くの紙幅を割き、3の「基礎射影」については「いかにして」「3に近迫しうるか」（全集1巻 p.15）と記され、この3へのプロセスは同論文の別の箇所に委ねられる。そこでより前の箇所をみると、以下の記述がある。「模写とは、自分が自分のありかたの歪みより解放されること、ほんとうの自分へのはまりかたの問題となってくる。ひねくれずに走ること、すなわち走ることのフォームにはまることが、その走り方の正射影を得ることである」（全集1巻 p.11）。この引用文の最初の「模写」は「模写論的美学的関連」における基礎射影の括弧部分に相当し、「正射影」は『美学入門』の方の基礎射影の括弧部分に相当する。そこでこの「フォームにはまることが基礎射影を理解するキーである。幸い中井は一連のスポーツ論で基礎射影の語は用いずとも、フォームにはまらる方法を記している。「スポーツの美的要素」（執筆年不詳）で中井はつぎのようにスポーツの愉悦と自己否定の繰り返しとの関連を記す。「人の一つの行為がその内面に無限なる群の（否定の否定、さらに無限なる否定としての）行為を胎むこと、その限りない集合、そこに存在の原現象（ウルフェノメナ）がその相を露わにする。深い意味のザッヘがその姿をあらわす。一つの「行為」とその「忍苦」、そこに存在の一角の暴露がある。・・・すなわち忍苦はもはやその放棄しかあり得ない極みにおいて、何物かに身を依する。その対象がスポーツにおいてフォームと呼ばれるところのものである」（全集1巻 p.442）。要は「否定の否定、

さらに無限なる否定」の繰り返しによってフォームが得られると「スポーツの美的要素」で記され、その「フォームにはまること」が「模写論の美学的関連」では基礎射影となる。さらに「スポーツの美的要素」ではつづけて、フォームが身につかない選手に対してコーチが「疲れ切らしめ」（全集1巻 p.443）で、自分のフォームを意識させないようにする。そうして「あらゆる虚言」（全集1巻 p.444）を脱落させ、「自らのはからいをする」（*ibid.*）させたとき、「生身の形式」（*ibid.*）としての「フォーム」（*ibid.*）が得られるという。したがって、この意味でもフォームを得る、すなわち基礎射影と自己否定とは結びつくものとして中井から考えられているといえる。本文でみたように「上部射影」は「(反映)」と括弧書きされ（全集3巻 p.112）、「基礎射影」は本注冒頭にも見たように「(模写)」と括弧書きされる（全集1巻 p.15）。つまり一連のこれらの概念は反映論、模写論の系譜に属するので、その意味では認識論である。ただし中井においては外部のものが認識主体にうつされるといふ単純な反映論を否定的に乗り越えたところに基礎射影を捉え、認識論をさらに「意識の構造」（全集3巻 p.112）の論、さらに芸術の創作論やスポーツのフォーム論へと発展させているといえる。したがってうつされた像をもつ自己自身を否定し、その否定を繰り返すことでほんとうの自己をみいだすというプロセスが「基礎射影」には生じてくる。いわば歪んだ世界をうつしつつ、その自分にうつされた映像を否定し、ただすことでえられるリアリズムである。それは対象の否定でありつつ、対象をうつしだす自分の歪みをただすものであり、その点で認識論であることを超えて「意識の構造」論であるといえる。そしてこれは今後の課題であるが、ここに光の二方向性の議論を介在させることで、「意識の構造」論から創作論、スポーツ論へと進みうる。

- 18) 基礎射影についての詳細は今後別稿にて論じたい。過去には後藤(2005 77-86; 248-250)で論じている。とくに注16)との関連で中井における技術や送り手・受け手の問題でいままで基礎射影は論じられて来なかったもので、その観点で改めて論じたい。
- 19) もちろん中間的であるがゆえメデイウムであるという見方もあり、その限りでは矛盾しないとの見方もありうる。実体概念はメデイウムの極みであるが、対概念である機能概念がミッテルかという、こういう連続性からしても、メデイウムの部分が残って

いるとの見方も可能である。よって2.2後半部での議論とこことをあわせて今後、論を展開させたい。

- 20) 基礎射影がそもそも「メデイウムに支えられたミッテル」に近い面を有するという見方も可能ではあるが、この問題は注の16)の議論とあわせて改めて論じたい。
- 21) 竹内(1980)は中井の戦前の代表作「委員会の論理」(1936)が「論理の自己疎外」を批判するために書かれた著述であるという趣旨で議論を展開した。理論や体系が永遠のものであるという状況をつねに解体しつつ、暫定的な論理を求めていくのが、この中井の著作の趣旨であるという。したがってミッテルの連続として捉えられる。中村(2010)も基本的にこの竹内の「委員会の論理」理解を引き継いでいる。
- 22) ミッテルの対等性の遍在はメイロウィッツ(2003)の描く、壁のない、場所感の喪失した状況が出現する現代社会に照応する。その意味でも「メデイウムに支えられたミッテル」の考え方は今日必要とされる。メイロウィッツはマクルーハンとゴフマンの影響を強く受けたと自認する。一方、中井は、11年遅く生まれたマクルーハンが出世作『機械の花嫁』を出した翌年に亡くなったが、彼のテキストにはマクルーハンに似ていてかつより精緻な部分も多い。没後もメディア論の第一人者であり続けるマクルーハンと中井を比較しつつ、中井をメイロウィッツに繋げる作業も今後していきたい。
- 23) この論文に関して、ここの部分のメデイウム志向ははっきりと指摘できるが、自己否定的ミッテルについては明確には断言できない。この「リズム」では機能論的数学的な時間解釈、存在論的時間解釈を述べつつ、中井自身が提示したこれらの見方をあえて自分で否定して、最後に集団的時間解釈を提示するという三段構えの論法を採っている。その三段構えの二番目の存在論的時間解釈の説明のなかで、本文の引用部分はでてくる。当初存在論的時間解釈は、数学的な時間解釈を乗り越えるものとして非常に肯定的に提示されるが、そのあとでそれを否定する流れのなかで、引用部分が示される。本来の自己を求めて漂う状態が記されつつ、それへの否定的な見方を提示するなかで引用箇所が示される。いわば存在論的時間解釈を否定したあと、集団的時間解釈を示す際の導入に相当すると考えられる。なお集団的主体は中井の他の多くのテキストにおいて個人の主体性の自己否定のもとに成立する。したがって、中井の全体的テキストと照合すると、ここには、自己否

定的契機、ミッテルが強くと考えられる。しかしこの「リズム」のテキストのみではそのことははっきりと示されていない。もっとも、中井自身が「リズム」で提示した自分の考え方を自己否定するプロセスでこの文章はでてくるという意味でもミッテルについて示唆はされる。しかしメディアム志向の確認は強いえるが、ミッテルについては示唆されるにとどまる。

- 24) 例えば「意味への抗い」という北田説に強く共鳴しつつ論文を展開する門部（2006）は、「スポーツという、直接的＝無媒介的身体運動」を言語活動に（この例では西田や田邊を前にした戸坂の発言）中井が喩えている部分に注目する。「体系それ自体が実践に媒介される可能性が考えられる」（門部 2006 140）と門部はいうが、これがおそらくはスポーツにおける基礎射影の形成過程であり、本稿で提示した「メディアムを求めたミッテル」という概念の一例ともいえるであろう。
- 25) 中井は戦後、尾道での文化運動で農村の青年を対象にカントを読み続けた。教養主義の典型としてデカンショマルクスという言葉がかつてあったが、「広間」の形成が教養の形成の一環なのかある種の専門性への途なのかという問題に、そのことは絡んでくる。
- 26) 深田康算が西田を否定的に評する際、Wirbel の語を用い、それを継承して中井はこの語に否定的意味合いをもたせるが、肯定的に用いる部分もある。田邊元がこの語を使って自分の思想を語っている部分もあり、事情は錯綜する。

## 参考文献

稲葉三千男（1987）.『マスコミの総合理論』創風社.  
 北田暁大（2004）.『〈意味〉への抗い—メディアーションへの文化政治学』せりか書房.  
 木下長宏（1995）.『中井正一—新しい「美学」の試み』リポート.  
 後藤嘉宏（1999）.「中井正一の出版論—図書館論との対比において」『出版研究』30, 71-92.  
 後藤嘉宏（2005）.『中井正一のメディア論』学文社.  
 後藤嘉宏（2008a）.「中井正一の理論にみられる三木清『パスカルにおける人間の研究』（1926）からの影響について」『図書館情報メディア研究』6（1）, 21-41.  
 後藤嘉宏（2008b）.「中井正一と共通感覚」『図書館情報メディア研究』6（2）, 15-36.  
 後藤嘉宏（2006）.「中井正一と思想の科学研究会に関する

研究序説—思想集団の継続性と断続性に着目して—」『コミュニケーション科学』24, pp.125-139.  
 後藤嘉宏（2014）.「人民戦線の人々—中井正一と仲間たち」『講座 東アジアの知識人 第4巻』有志舎, 141-162.  
 杉山光信（1983）.『思想とその装置1 戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社.  
 鈴木正（1969）.「実体」『社会科学大事典9巻』鹿島研究所出版会.  
 竹内成明（1980）.『闊達な愚者—相互性のなかの主体』れんが書房新社.  
 武谷三男（1962）.「思い出」.中井正一著・久野収編『美と集団の論理』中央公論社, 242-251.  
 武谷三男（1969）.『武谷三男著作集4』勁草書房.  
 鶴見俊輔・栗田勇・佐々木基一・多田道太郎・永井潔・野間宏（1963）.「中井正一とわれわれの時代—座談会—民主主義の未来形—」『思想の科学』1963年5月号（第5次14号）, 71-89.  
 中井正一（1964）.（久野収編）『中井正一全集第三巻—現代芸術の空間』美術出版社.  
 中井正一（1965）.（久野収編）『中井正一全集第二巻—転換期の美学的課題』美術出版社.  
 中井正一（1981a）.（久野収編）『中井正一全集第一巻—哲学と美学の接点』美術出版社.  
 中井正一（1981b）.（久野収編）『中井正一全集第四巻—文化と集団の論理』美術出版社.  
 中沢新一（2011）.『フィロソフィア・ヤポニカ』講談社（学術文庫）.  
 中村雄二郎（1979）.『共通感覚論』岩波書店.  
 丸山真男（1961）.『日本の思想』岩波書店（岩波新書）.  
 三木清（1980）.『パスカルにおける人間の研究』岩波書店（岩波文庫）.  
 メイロウィッツ, ジョシュア（2003）.（安川一ほか訳）『場所感の喪失〈上〉電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』新曜社.  
 門部昌志（2006）.「集団／身体／言語活動」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』7, pp. 131-144.  
 門部昌志（2014）.「中井正一と概念の問題」『研究紀要』長崎県立大学（14）, pp. 107-122.  
 山田宗睦（1959）.『戦後思想史』三一書房（新書）.  
 山田宗睦（1975）.『昭和の精神史—京都学派の哲学』人文書院.

（平成28年3月30日受付）

（平成28年7月15日採録）